

自意識と「運命」——T. E. ロレンス論(2)

浅井雅志

序

マックス・ヴェーバーの思想の鍵概念として知られる「運命」という言葉の使い方には、ある特定の傾向が見られる。E・バウムガルテンはこれを以下の三つの領域に分類する。すなわち、(1) 将来の世界における人間の自由の運命、(2) ある「祖国」に生まれることにまつわる運命、(3) 個人的運命、である。このうち、第2のものをバウムガルテンはこう述べている。

一定の「祖国」(国民、民族)の子として生まれるという普遍的な、同時にその都度特殊的な運命により、どのような種類の、いかなる程度の客観的束縛と主観的忠誠とが人間に要求されるか？ 人間がその父祖や子どもたちの国である一定の国と歴史との連関において自分の生活をもつという絶対的な条件により、どれほどの「壯嚴」ないしは呪咀が人間の本性には与えられるか(または課せられるか)？¹⁾

「運命としての祖国」がヴェーバーにとって魅力と呪縛の相拮抗するものであったことは多くの評者の指摘するところだが、T・E・ロレンスの祖国に対する態度にもこれと同質、そしておそらくは同程度のアンビヴァレンスが見て取れる。この「アンビヴァレンス」はロレンスという不可解な存在を読み解く最大の鍵であるが、たとえば彼を「オリエンタリスト兼帝国代理人」²⁾と断定するエドワード・サイードなどはこれを見過ごしている。あるいはスレイマン・ムーサは、サイードほど断定的ではなく、またロレンス内部の葛藤にも理解を示した上で、なお彼を大英帝国の「手先」³⁾と見なしている。本稿では、まずこのような、ロレンスを帝国主義者、ないしは心ならずもその「手先」となったとする論を検討し、その上で、アラブ反乱以後の、常人の理解を越えるようなロレンスの行動の底に潜むものを考察してみたい。そこに浮かび上がってくるのは、運命としての祖国、運命としての歴史には人間として可能ながざり耐え、献身したが、近代人にとりつく運命としてのニヒリズムとの苦闘にはついに破れざる1人の人間の姿である。そこにいたる彼の内面の変遷をたどることで、この「敗北」の意味を読み解いてみたい。

1. 壮大な意図

ロレンスについての「アラブ側の唯一の文献」⁴⁾の著者を自認するムーサは、前述のようにロレン

スを英国の帝国主義の「手先」と見ているが、ロレンスの生きた時代、すなわち帝国主義の最後の残照が燃え上がった時代には、そうした「手先」、いや、帝国主義の権化のような者すらいくらでもいたことは歴史が明らかにしている。そうした中で彼が特にロレンスに批判の矛先を向けるのは、ロレンスが「英雄」になり、後世の人間にあまりに大きな影響力を、それも英国あるいは西洋に有利な影響力をもち、それがためにその帝国主義が十分に批判されないままやむやみにされている、いやそれどころか栄光につつまれてさえいると感じるからであるようだ。彼の言葉によればこうである。

ロレンスの賛美者の著作のなかであれ、中傷者の著作のなかであれ、目を皿のようにしてアラブを正しく扱う者を捜してみても見当たらない。……アラブは不正に扱われた。……アラブはロレンスの鳴り物入りの評判にあきれると同時に、眉につばつけて眺めてきた。なぜなら<反乱>は、アラブの目的を達するため、アラブによって実行された、純粋にアラブの試みであったと彼らは理解していたからである。⁵⁾

さらにムーサは、日本語版に寄せた序文の中でこう言っている。「わたしは、ある『文化的義務』、すなわち、アラブ側の物語を提供して公平な見方をもたらす必要に迫られていることを自覚した。⁶⁾このように、ムーサがこの著作に取りかかった動機は、祖国、あるいは自らが属する民族が不当な扱いを受けているという、いわば民族的義憤である。では、彼が展開するロレンス批判にはどの程度の説得力があるだろう。彼はまず、ロレンスの「英雄」化を一種の虚偽と考える。そして、その根拠として、「ロレンスの伝記作者はすべて、ロレンス自身の声明および著述をほとんど唯一の依りどころとしている」⁷⁾こと、および、彼の著述が「でっち上げるのが習性になっていたうその数かず」⁸⁾に満ちていることをあげる。しかし実は、ロレンスの伝記作者たちは、ロレンス自身の著作以外にも、彼と行動をとともにし、彼の生活をその目で見たさまざまな人たち（たしかに大半が非アラブ人であるが）の著書や証言を利用している。この事実を考慮に入れれば、ムーサが示唆するように、西洋人がいわば一致団結してロレンス神話を作り上げよう、アラブの努力を無視しようとしたとは考えられない。むしろムーサの批判の背景に、サイドが指摘するような無意識の「オリエンタリズム」がある可能性は高いが、彼の論にそのような広大な視野は見られない。それに何よりロレンス自身が、ムーサのこの主張をすでにその著作で行っているのである——「この戦争は、アラブ人が、アラブ人の目的のためにアラビアで行ったものである」⁹⁾と。

このように見てくると、そのかなり緻密な背景的事実の検証と考察にもかかわらず、ムーサのこうした主張は、なにか非常に重大なものを見落とし、ある奇妙な土台の上でなされているように思われる。それはもしかしたら彼の「文化的義務」、「民族的義憤」ゆえの目の曇りがもたらしたものかもしれないが、むしろこうした「誤解」の最大の原因は、彼がロレンスの著作を純粋な歴史的記録だと考えているところにあるようだ。この点は慎重に考察してみる必要がある。

結論から先に言えば、ロレンスの最大の著述であり、ムーサがその史的正当性をなんとかくつがえそうとしている『叡智の七柱』は、ムーサが考えているような通常の意味での「歴史的記録」で

はないということである。ロレンス自身がその「序文」でこう述べている——「ここに書かれているのはアラブ反乱の歴史ではなく、それに加わった私についての記録である。」¹⁰⁾あるいは、詩人であり、後には彼の伝記を書くことになるロバート・グレイヴズには「……これは何ひとつ削除も隠しだでもしていない私自身の等身大の肖像」¹¹⁾だと言っている。むろんこうした言葉を根拠に、彼の記述がすべて非歴史的であるとか、あるいは半フィクションであると考えるのは強引すぎよう。しかし少なくともこの言葉は、ムーサの丹念な作業、つまりこの本の記述と、いわゆる「史実」や他の（とくにアラブ側の）関係者の証言とのずれを指摘するという作業を、なにかしら不毛なものにすることもまたたしかである。何より肝要なのは、ロレンスという存在に焦点をあて、その謎の解明を通して人間存在への理解を深めることをめざす者は、彼の著作を、フィクションでもノンフィクションでもないひとつのテキストとして扱うであろうし、そうした者にとっては、ムーサの採ったアプローチおよびその成果は、参考にはなるが不十分だということである。¹²⁾

たしかにロレンスは、ジェフリー・マイヤーズも指摘するように、自著の歴史的正確さについて相矛盾する言葉を残している。一方でバーナード・ショーには「『叡智の七柱』は歴史を想像力の生み出したものにしようとする努力のひとつの結果です。現実を劇化しようとした二度目の試みなのです」と言い、また前出のロバート・グレイヴズには、「この本の歴史的正確さについてだが——前にも言ったように、私には何も保証できない。ただ、全体にわたってなるべく不正確さを避けようとしたとは言える」と書きながら、他方では、E・M・フォスターには、この本は「アラブ反乱で実際に起こった事の完全な叙述」であると言い、エドワード・ガーネットには「出来事は日記のように正確な順序で進み、全編にわたって文字どおりの真実です」と書き送っている。マイヤーズ自身はこうした「矛盾」をほとんど考察もせず、あっさり「彼の反乱についての記述は基本的に正確である」¹³⁾と結論づけているが、説得力に欠けるのはいうまでもない。

マイヤーズは別の箇所で、戦後、ロレンスがロンドンからオクスフォードに帰る際、レディング駅での乗り換えのときに、苦勞して書き上げた最初の草稿を置き忘れたという有名なエピソードについて論じているが、そこでグレイヴズの見方を紹介している。グレイヴズはロレンスがわざとこの最初の草稿を捨てたのではないかと考えているが、その理由は、この初稿が、日記などを参照しつつ書いたために、現在残っている最後の版より「正確」なものになったので、これを捨てて、「記憶だけにもとづいて書き、その歴史性を弱めようとした」¹⁴⁾からであると言う。つまりそのほうが「内的な自伝」を書きやすい、というわけだろうが、まったくの推測とはいえ、ロレンスの心理の機微に触れているようで、マイヤーズの見方よりは説得力がある。

しかし、もしこれが正しいとすれば、なぜロレンスは「歴史性を弱め」たいと思ったのだろうか。「叡智の七柱」の「序文」にある次の言葉がひとつの鍵を与えてくれるかもしれない。

人はみな夢を見る。しかし見方は一様ではない。夜に、心のほこりをかぶった片隅で夢を見る者は、朝目覚めたときにはそれが幻だったことを知る。しかし昼間に夢を見る者たちは危険だ。その夢を実現しようと、目を開いたままそれを実行に移すかもしれないからだ。私がやったことはまさにそれであった。すなわち、新たな国をつくり、失われた影響力を復活させて、

靈感を受けた二千万のセム族が、その民族的な思念を奮い立たせて心に描いた夢の宮殿を建てる土台を、彼らに与えたいと思ったのだ。¹⁵⁾

「夢を実行に移す」という比喩で表現しようとしているロレンスのアラブ反乱に対する姿勢は、そのまま彼の自著に対する姿勢と取れるのではないか。つまり、アラブ反乱への参加が自分の「夢」の実現をねらうというきわめて個人的なものであったのなら、この著作も正確な歴史的記述を意図したものではなく、自己の精神の軌跡、その葛藤と動揺を記録し、願わくばそれを乗り越えようとした必死の試みであったのではないか。もしその過程で、ムーサをはじめとするアラブの人たちに不利になるような、あるいは侮辱するような記述がなされたとしたら、その不正確さを指摘する努力はなされてしかるべきだろう。しかし、『叡智の七柱』という著作を歴史的記録と考へ、そこに誤謬を探するのは無益である。この巨大な作品はそのような単純・平板なものではなく、またそのようなものとして意図されたのでもない。ロレンスははるかに複雑な、あるいはもっと正確に言えば、はるかに偉大な書物を書こうとしたのである。

彼はある書簡の中でこの自著についてこう言っている。

……私の本にはいいところは何も見当たらないし、自慢しようとも思わないが、それでも人がほめてくれると嬉しい。この本に対してはひどい嫌悪感と愛着の念が交互にやってくる。まずまずの好著だとはわかっているのだが、そうでなければいいと思うこともよくある。もしあれほど大きな目標を掲げないで書いていたら、意図をもっと明確にでき、もっとはましな本にできたことだろう。しかしできあがったものは巨大な失敗作だ（構成も各部のバランスも悪く、一貫性も流れるような筋もない）。でもおもしろいことに、私の好きな本の中にはこうした失敗作が多い——『モービー・ディック』、『ツァラトゥーストラはかく語りき』、『パンタグリユエル』——こうした本の著者はまるでロケットみたいに天空に飛び上がり、そして破裂してしまった。私は自分のこの本がこういった本と同クラスの作品だと言ってるんじゃない。でも私にとってこれは、『ツァラトゥーストラ』がニーチェにとってもっていたような意味をもっているんだ。つまり自分の力が及ばなかった何かなんだ。¹⁶⁾

野心と謙虚さが同居するこの文章から読み取れるのは、こうした「偉大な失敗作」に並ぶ作品を書こうとした強い欲求である。また以下の言葉は、オクスフォード大学時代からの親友であるヴィヴィアン・リチャーズが『叡智の七柱』について書き送ってきた感想にロレンスが答えたものであるが、きわめて示唆的である。

きみは物語の壮麗さに酔っている。でもそれでいいんだ。ここでぼくが語っているのは、これまで人間に物語るよう与えられたもののうちでもっとも壮大なもののひとつなんだから。

芸術家であるよりむしろ批評家だ [という点について]。それはぼくの中の分析的な性向のた

めだ。どうにも消しようがない。意識的な創作の中では、批評家はもちろんすなわち芸術家だ。……つまりほくは創造的批評というものがあると言いたいんだ。文学的でも芸術的でもなく、個人的なもの(伝記)や倫理的なもの(パイターの『想像の中の肖像』みたいな)が。……完全な芸術家とは半分批評家で半分創造者なんだ。

自分を過小評価することはほくには必要だ。……ほくはばかばかしいほど過当に評価されてきたし、今もそうだ。超人なんていないし、ほくもまったく普通の人間だ。このことは、この作品の芸術的結果がどうなろうとはっきり言うつもりだ。この点に関しては、ほくは自分について真実を語る数少ない人間のひとりだろう。¹⁷⁾

このような自己分析と意気込みに基づいて書かれた書物が、ムーサが考えるような歴史的記録にならなかったことはむしろ自然であろう。同じ手紙の次の言葉はさらに意味深い。

でも [リチャーズが言うように] 最上の芸術作品においては静けさこそが「絶対的な」要素だとはどうしても思えない。……ラブラーの作品、『モービー・ディック』、『カラマーゾフ』といったほくの偉大な本は読者に汗をかかせる。……たしかに『叡智の七柱』はほくにとっては大きすぎる。いや、どんな作家にとっても大きすぎるだろう。……読者を疲れさせて共感の気持ちを奪い去ってしまうだろう。こんな本は失敗作になるほかない。優雅なものってのはいつだって自分の能力の範囲内で作り出されたものなんだから。でもきみも言っているように、この本の欠点や不完全さは、むしろそれ自体がその芸術的効果に貢献しているんだ。¹⁸⁾

「読者に汗をかかせ、疲れさせ」、しかもそれでいて芸術的な効果を及ぼすような作品、彼がめざしていたものがそのようなものであったことは間違いあるまい。

ロレンスの死後、ウィンストン・チャーチルはこう述べている——「戦争と冒険の記録として、また世界にとってアラブがもつ意味を提示したものとして、『叡智の七柱』を越えるものはない。これはかつて英語で書かれた多くの偉大な書物と肩を並べている。」¹⁹⁾ これに対してマイヤーズは、この本はそのような記録以上のもので、「その偉大さはロレンスの軍事記録にあるのではなく、彼の自己探求と、そしてそれを白日のもとにさらしたことにある」²⁰⁾ と言い、さらにはこれをロレンスの「精神的自伝」と呼んでいるが、以上の考察からもわかるように、この言葉の正しさは明白であろう。(もっともチャーチルもこれを「記録」としてのみ偉大だと言っているのではないことはその文脈から明らかである。)

いや、この点についてはロレンス自身がだれよりも明瞭に語っている——

私はこれまでずっとひとつの熱望を抱いてきた。創造的な形で自己を表現する力を手に入れたいと願ってきたのだ。しかしその技術を獲得するには私はあまりに散漫であった。ところが——ひねくれたユーモアなのか——ふとした偶然から私に行動の人の役が割り当てられ、アラブ

反乱へと投げ込まれたのだ。これは格好のテーマで、この目で見、手で触れられる叙事詩であった。かくして私には文学への、非技術的な芸術へのはけ口が与えられたのだ。²¹⁾

彼にとって反乱は、アラブの解放という「歴史」にかかわるものであったと同時に、あるいはそれ以上に、彼の自己表現欲に格好の材料を提供したのである。

2. 「運命」としての帝国主義

以上の考察から、ムーサの論が自明としている土台、およびロレンスという存在に対する彼のアプローチ、すなわち彼を歴史的、社会的にのみ見ることには基本的な誤りがあることが明らかになったが、にもかかわらず、ムーサの著書がそれ以前の西洋の論者のものには見られない視点および意見を提供していることに変わりはない。前にも述べたように、彼の根本的な執筆動機は「文化的・民族的義務」、すなわち反乱で大きな努力と犠牲を払ったアラブはちっとも評価されず、それに側面から、しかも明らかに帝国主義的意図をもって参加したロレンスだけが栄光を独り占めにしていることを白日のもとにさらす、という義憤の念であった。「<アラブの反乱>が主体であり、ロレンスの話はその枝分かれの部分だとみなされるべきだが、西側の著者たちは想像力でこの構図をひっくりかえし、<反乱>をロレンスが起こしたものとして描いた」²²⁾ というわけだ。「反乱をロレンスが起こしたものとして描いた」評者は誰もいないだろうが、こうしたイメージが「英雄」ロレンスの像の確立に付随して一人歩きし、広まっていったことはたしかであろう。

ムーサの主張するもっとも根本的なテーゼは、ロレンスは帝国主義者だというものだ。ムーサ自身、帝国主義を定義した上でこの問題を論じているわけではないので、ここでもあえてその煩はとらないが、彼の主張は次の言葉に代表されよう。すなわちロレンスは「なによりも第一に自国の権益に大きな関心を持つ英国市民」²³⁾ であり、また「たしかにアラブの友人だったが、それは自分の国の利益と一致した場合のことであり、上司の指示に沿ったものであった。」²⁴⁾ こうした主張に対し、戦争時にこの意味での「帝国主義者」でなかった人間はいるのか、と反論するのはやさしいが、しかしそれでは要点を見逃すことになる。人間誰もそうなのだからロレンスもそうしたのだ、と言うことは、ロレンスという存在の解明を放棄することになる。われわれはあくまで、軍事行動におけるロレンスの行動と、その後の行動とを有機的に関連づけて見なければならぬ。もしロレンスが軍事的・戦略的場面において誰もがするように、つまり自国の権益を守るという方向で行動したのだとすれば、なぜその後は常人とはまったく違った行動をとったのか。一見帝国主義的に見える彼の行動の底には、おそろべき深淵が潜んでいたのではないか——われわれが問うべきはこの点である。むろんムーサはこの点について彼なりの答を用意している。

彼の「第一の性格」は、彼に原則を押し立たせ、もめ事や困難をうまく切り抜けさせたが、それでは彼の過剰な野心を完全に充足させることができなかった。そこで彼は補足的にほらを吹いたり、偽ったり、でっち上げをやり、それが彼の空想を満足させ、野心を充足し、切ない

思いをみたすうえで役だったのである。同時に彼の「第二の性格」は彼の内部に学識ある者の良心を喚起させ、傍聴人や判事として行動させた。すなわちロレンスは、自己の内部の不可解な矛盾に揺さぶられていた²⁵⁾のである。

ロレンスの自己矛盾、内部の分裂は本稿の主題であるが、ここでのムーサの考察は、こうしたロレンスの内部の矛盾の解明ではなく、むしろその矛盾が引き起こした事態、もっといえば、アラブの不利益の指摘に焦点が絞られている。しかしここでわれわれがロレンスに注目するのは、まさに彼が「不可解な矛盾に揺さぶられていた」からにはかならず、彼の後半生が「牢獄の番人」の監視のもとに送られたからである。すなわち、彼がその「自意識」にさいなまれた形と強さとがわれわれの関心をひくのである。

その考察に入る前に、ここでは、ロレンスのアラブ反乱との関わりを通観し、彼が帝国主義者であるという批判を検討しておきたい。彼は1910年、優等でオクスフォード大学を卒業するが、そのときの「十字軍の城」という卒業論文がきわめて高い評価を受け、以前から彼に注目していたアシュモリアン博物館のホガース博士にカルケミシュの発掘に誘われる。この4年近い近東滞在で、1909年に卒論のための調査旅行で滞在したときかなり身につけていたアラビア語にいっそうの磨きをかけ、アラブ人の思考および生活様式にもますますなじんでいった。そうしたときに第1次世界大戦が勃発する。一時的に英国に帰っていて、「うんざりするような退屈」²⁶⁾を感じていた彼は、ホガースに頼み込み、その推薦を受けてカイロの陸軍情報部に配属される。1916年、アラブが反乱に立ち上がるが、ドイツの支援を受けるトルコ軍の反撃にあい、戦況は膠着状態に入る。この地域に帝国主義的な野心を抱くイギリス軍は、その打開をはかるべく、ロナルド・ストーズを反乱の首謀者であるメッカの大守フセインのもとに送りこむ。これにロレンスは同行するのである。

こうして彼はアラブ反乱に巻き込まれていくのだが、そのいきさつはかなり曖昧である。『叡智の七柱』の記述によれば、彼はカイロの情報部の無能さにうんざりしており、またアラブ反乱を成功に導く自分の能力への自信もあって、この同行を自ら望んでいたようだが、それにしては不自然な点が多い。たとえば彼はアラビア行きにいたる経緯をこう書いている——「やがて彼ら〔情報部の者たち〕は私に我慢ができなくなってきた。そこで私はこの好機を戦略的に利用して10日間の休暇を申し出た。申請理由は、ストーズが大守〔フセイン〕に会いにジッダに行くので、私も休みをとって彼と一緒に紅海で船遊びをしたい、ということにした。」しかし、こうした大役に同行する理由として、これはいかにも弱い。それどころか彼はすぐにこうつけ加える——「……こうした詐欺的な逃げ方は、その意味では東洋的だ。しかし私は、もしきちんとした助言をすればアラブ反乱は最終的には成功するという自信があったので、それでもって自分の行為を正当化した。私はこの反乱の発議者であり、それに大きな期待を抱いていたのだ。」²⁷⁾これも、一情報部員の言葉としてはいかにも尊大であろう。ナイトリイとシンプソンは、「彼のメソポタミアからの報告書、『メッカの政略』という論文、『シリアの征服』という覚書などからも察せられるように、実際には、ロレンスはすでに反乱の発想を推進する舵手であった」²⁸⁾と、ロレンスのこの言葉をほぼ認めているが、たとえそうであったにせよ、ロレンスがこのあたりの経緯を意図的に曖昧にしているという印象はぬぐえない。

ともかく、こうして、アラブとイギリス軍情報部とをつなぐ政治情報将校としてアラビアに渡ったロレンスが、フセインの三男ファイサルに「統率者に必要な熱情と、われわれの科学を実行に移すだけの理性をあわせもった」²⁹⁾ リーダーを見出すのは有名な話である。そしてアラブ軍と行動をともにし、紅海の要衝アカバに陣取るトルコ軍を背後から衝くために決死の砂漠越えを敢行して、ついにこれを陥落させたのは、「アラビアのロレンス」の英雄譚の中でもっとも華々しい箇所であるが、そうした中で彼は徐々に一情報将校という枠を越えて、ファイサルとともに反乱軍全体を率いるまでになる——これがローウェル・トマスのショーに始まって、近くはデイヴィッド・リーンの映画などで喧伝された「ロレンス神話」であり、ムーサはもとより、リチャード・オールディントンのような英国人までが疑っているものである。

この稿はそうした真偽の解明を目指すものではない。前にも述べたように、筆者はロレンスの書き残したものをあくまでテキストとして読んでおり、その意味ではそもそも「真偽」などは問題にならない。これは、人があることを書くとき、その書くという行為そのものがすでに、極論すればフィクション化を行っているのであって、ここでは、書かれたものが「真実」であるかどうかは的はずれた問いだ、という立場である。問うべきは、なぜ書き手がそのように書いたのか、書き方に説得力はあるのか、そしてそれが開示するものは何なのか——これである。

そうした目でこのテキストを見ると、そこに浮かび上がってくるロレンス像は、帝国主義者などという平板なものではない。しかしムーサやサイドのような評者の目には、同じテキストもそうは映らないようだ。では、そうした目に帝国主義的と映りそうなテキストをいくつか検討してみよう。なぜアラブ反乱にかかわったのかと問われたロレンスは、強さの順に4つの動機をあげているが、その2番目と4番目はそれに該当するであろう。

(ii) 愛国的なもの。私はこの戦いの勝利に寄与したかった。アラブ人がアレンビー [英軍最高司令官] を助けてくれたおかげで、彼の [軍の] 死傷者は何千人も減ったのです。

.....

(iv) 野心。きみもライオネル・カーティスが帝国の概念——自由な人々の共同体 (コモンウェルス) ——をみんなに受け入れやすいものにしたことは知っているでしょう。私はその考えがアングロ・サクソンの形を超えて広がることを希望しました。自分でものごとを考える人々の新たな国家を建設し、彼らがわれわれの自由を歓呼して迎え、そしてわれわれの帝国への参入を望む、そのような事態が起こることを願ったのです。私から見れば、結局のところエジプトやインドにはこれ以外に道はなく、ならばわれわれの帝国内にアラブの自治領を生み出してその道を容易にしてやろうと思ったのです。³⁰⁾

これが単純な帝国主義的言辞でないことは明らかだが、一方でその背後に、サイドの言う「オリエンタリズム」のような無意識の傲慢さ、あるいは東洋に対する優越意識が働いていることまでは否定できない。しかし、「序」に引いたバウムガルテンの言葉を借りるなら、一定の祖国の子として生まれるという運命は、程度の差はあれその個人に「束縛」と「呪咀」を投げかけるのではないかと。

それをまったく無視してこの問題を論ずるとすれば、片手落ちと言うほかあるまい。

同じ手紙の後半で彼は、反乱の勝利の結果そうした動機にいかなる変化が起こったかを述べている。

動機 (iv) これは残った。しかし私をその地に留まらせるほど強いものではなかった。私はアレクサンダーに休暇を請い、許されると直ちに帰国しました。すべての中でもっとも弱いこの動機の薄れゆく残像があったればこそ、パリその他でファイサルのためにあのような闘いを演じたのです。……

アラブの反乱を押し進めて以来、私は誰かに対して不正を働いたとは思っていません。とはいえ、私はアラブでの軍務の中で身を売ってしまいました。というのも、英国人が赤色民族に身を委ねるなど、スウィフトのフーイヌムのように野蛮人に身を売るも同然だからです。しかしながら、私の身体と魂は私のものであり、誰も私が彼らにしたことで私を責めることはできません。あなたがたみんなにとって私は潔白なのです。ここまで読んだら、どうか全部燃やしてください。こんなことは誰にも言ったことはないし、これからもないでしょう。自分の内部をさらけだすなんてみっともないことですからね。打ち明けたことですから空しくなっている自分を見て、私は笑っています。³¹⁾

ここに見られる内部の葛藤と、それが生み出す不気味な自嘲の響きを見逃してはならない。いかなる内的な葛藤があったにせよ、ともかく彼は帝国主義的な行動をとったのだ、と言うなら、そうかもしれない。しかしそう言ったとたん、ロレンスは歴史上の一人物、一点景に退き、クリストファー・イシャーウッドの「彼はひとつの世代の神経症を一身に背負ったのだ」³²⁾ という言葉に端的に見られる、自意識と苦闘する近代人の一典型たるロレンスという像はかき消されてしまう。

この点は、一人の人間はどの程度時代に巻き込まれ、また時代から自由なのかという問題に密接に関連している。これには客観的に正しい答はないだろうし、またいかなる答もその人の立場を語るにすぎないだろう。しかし少なくとも言えるのは、時代を超越しているかのごとく、このように歴史上の一人物を裁いてはならないということである。³³⁾ ロレンスにはもちろん帝国主義的側面があったし、またそういう行動もとった。そしてそれをすべて時代の責任に帰するのはまちがっている。しかしそう言う一方で、歴史の必然に、あるいは冒頭で引いたヴェーバーの言う「運命」に目を向けない者は、歴史の一面しか見ていないことになろう。バウムガルテンはヴェーバーのいう「運命」を、「大略、人間の意志や人間の計画に対してどうしても甘受せざるをえない『優越した力』」³⁴⁾ と考えているが、ヴェーバーが国家というものをまさにこの意味において考えたことこそ注目すべきであろう。このヴェーバーの見方は、たとえばサイド的な「ノーマッド（遊牧民）の思想」³⁵⁾ の対極にあるものだが、第1次世界大戦にロレンスとは違った形でかわり、パリ講話会議にも出席し、この大変動に深く傷つきつつもその経験から目をそむけず、これを凝視してニヒリズムと対決した者の見方として考慮すべきものをもっている。

終戦直後、ヴェーバーはある人にこう書き送っている。「いずれにしても私は内乱や敵の侵攻があ

りはしないかと恐れています。もしそうになったら、いかに苦しく恐ろしくとも、やはりそれはやりとげられねばなりません。なぜなら、私はこのドイツの不滅を信じているからです。私はこのもっとも暗い汚辱の時代においてほどドイツ人であることを運命の賜物であると感じたことはありません。いかに事態が困難であろうと、もう少し耐えて下さい。」³⁶⁾ この、国家を、あるいは共同体を運命として引き受ける態度は、ではいったいどこから出てくるのだろう。

戦時中に執筆され、ヴェーバーの全思索の中で重要な位置を占めるとされる「宗教的現世拒否の段階と方向の理論」、一般的には「中間考察」と呼ばれる論考で、彼は以下の注目すべき言葉を記している。

力の脅迫の最たるものとしての戦争は、まさしく近代の政治共同体のなかに、あるパトス、ある共同体感情をつくりだす。かくて戦争は、戦う者の献身と無条件の受難の共同体、さらには困窮者にたいする憐憫と愛情——自然発生的な団体のあらゆる枠をとりはらう愛情——の活動を、大量現象としてよびだしてくる。これは、わずかに友愛倫理の英雄共同体のかたちにおける宗教にしてはじめて対等でありうるほどのことがらなのである。そればかりではない。戦争は、具体的な意味において他のいかなるものもなしえないようなことを、兵士自身にたいしてやってのける。戦争でしか考えられない死の意味、死の尊さというものを、兵士自身に感じさせる。戦場にある軍隊共同体は、今もむかしの従士団とかわりなく、ともに死を誓った共同体は、そうしたもののなかで最大の共同体と自覚している。死は人間共通の運命であり、それ以上のなにもものでもない。それは、なぜほかのひとではなくてこのひとが、なぜほかのときではなくてこのときに死ぬのかわからぬままに、すべてのひとに襲いかかる宿命である。……避けようにも避けるすべもないこうした死と戦場の死とではどこがちがうかといえば、戦場においては——これほどの規模では戦場においてのみ——個人ひとりびとりが、自分はなにかの「ために」死ぬのだと信じていることができるという点にある。自分が死に立ち向かわねばならぬという事実、そしてその理由および目的を、兵士は普通まったく疑わず、そうした者は、戦場の兵士以外には、ただ職に殉ずる者があるだけである。救済宗教が取り組んでいるような、きわめて普遍的な意義における死の意味いかなどという問題は、そもそも成立する前提がみつからないほど、戦場の死は彼に自明のことなのだ。このように、死をば意味ある神聖な事象の列に加えることこそ、政治的権力団体に固有な品位を維持しようとする、いっさいの努力の究極の基礎にある作業なのである。³⁷⁾

こうした見方は、現在から見ればいかにも軍国主義的、国家主義的で容認しがたいものであるかもしれないが、しかしこれを単にそうしたものとして否定するなら、ヴェーバーの真意を見逃すことになる。ここには、いわゆる社会学的見地から一步踏み込んで、戦争を、死の共有による究極の共同体として、そしてその共同体意識を、近代人の陥っている疎外、あるいはニヒリズムに対する巨大な防波堤とさえ見なす「心理学者」ヴェーバーがいる。これは戦争賛美などではむろんなく、ある不可避的なできごとに対処する意志の姿勢の表明である。こうした観点はムーサやサイドには

決定的に欠けており、そして戦時中のロレンスが共有していたものである。

3. 「運命」としてのニヒリズム

ヴェーバーもロレンスも戦争を、そしてそれを支える帝国主義をひとつの運命と受けとめたが、その運命を死の相貌のもとに見た点にこそもっとも本質的な共通性がある。しかし次のようなロレンスの言葉を見ると、彼とヴェーバーの意志の姿勢には微妙なずれが忍び込んでくる。

……生は、全体として見れば感覚的なものにすぎず、その極限において生き、そして愛すべきものなのだ。反乱には休息所はありえず、歓喜の配当も支払われない。反乱の精神は増大するものであり、感覚が耐えられるところまで耐えるべきものだ。一步前進するごとにそれを足場とし、さらなる冒険、より深い困苦、より激しい苦痛へと向かうべきものなのだ。感覚は前進も後退もできない。感じられた感情は克服された感情であり、すでに死せる経験だ。それをわれわれは表現することで埋葬してしまうのだ。

彼ら [アラブ人] はよく知っていた、砂漠の民であるということは、この世界にも、生にも、何ものにも属さぬ敵、すなわち希望そのものと、終わりのない戦いを続けるよう宿命づけられているのだということ。そして失敗こそは、神が人間に認めた特権であるらしい。われわれは、自分にできる範囲にあることをやらないことによるのみ、この特権を行使できる。そうすれば生はわれわれのものとなる。つまり、生を安っぽく扱うことによってそれを征服することができるにちがいないからだ。死こそは人間が行うことの中で最上のものであり、われわれの力の範囲内で自由に行使できる最後の誠実さ、究極的な安逸である。このふたつの極、死と生、いや、そこまで極端でなくとも、安逸とあくせくした生活という両極の中で、われわれは生活（生の実質）を可能なかぎり避け、あくまでも安逸にしがみつかなければならない。そうすれば、行為よりもむしろ無為を押し進めることができるだろう。……非物質的なもの、肉体ではなく精神にかかわるものを生み出すには、肉体の要求をみたすための時間や苦労をおしまねばならない。たいがいの人間は、肉体よりもはるかに早く魂が老けてしまうからだ。人類は労役からは何も得てこなかったのだ。

確実な成功などにはなんの名誉もない。しかし確実な失敗からは得るものは多いだろう。…冷徹な眼をもつ者にとっては、失敗こそが唯一の目標である。われわれはどこまでも信じなければならぬ、成功というものは、それに向かって奮闘しつつも実は失敗を切望し、ついには死にいたること以外にはないということ。そして、絶望のあまり「全能者」にもっと強く打ってくれと懇願すると、「彼」は望み通り打ってくれるが、そうして打つことによってわれわれの苦痛にさいなまれた自己を和らげ、「彼」自身の滅亡を招く武器へと化するのだということ³⁸⁾を。

この一節は、おそらくは難解な『叡智の七柱』の中でもとりわけ難解で、また彼の「病」をどこよ

に向かって自分を親しく開くことがどうしてもできなかった。好かれようと努力して失敗に終わるのが怖くて、行動に移せないのだ。……親しげな態度は、相手が同じ言葉で、同じ形で、そして同じ理由で完全に応えてくれなければ恥ずべきものに思われたのだ。

それにまた、有名になりたいという気持ちも強かったが、そんな気持ちがあることを知られるのも怖かった。傑出した人間になりたいという欲求を軽蔑するあまり、いかなる栄誉もこれを受け取ることを拒否したのだ。私は自分の独立性をほとんどベドウィン同様に大事にしたが、ヴィジョンを見る力が弱いために、描かれた絵の中で自分の姿が一番はっきり見え、ふと耳にしたおぼろげな評判が、私がどんな印象を他人にあたえているのかを一番はっきり教えてくれるというありさまだった。私自身をこのようにふと耳にしたり、ふと見たりしたいという強い欲求こそが、私の神聖な砦をいつも脅かしていたのである。⁴⁰⁾

この最後の言葉は、デラア事件の記述を結ぶ言葉——「あの夜、デラアで、私の完璧性の砦は永久に失われたのである」⁴¹⁾を強く思い出させる。この「砦」は、前稿でも触れたように、「彼が自分の中に、あるいはすべての人間の中にあると想定していたなんらかの自己充足性、生まれながらにもっている完全性、他の人間が決して押し入ってはならない領域、彼自身の言葉を使えば『生命の核』と考えていだろう。そしてここでの記述が明瞭に示しているのは、彼が自己の中の分裂を強く意識し、見られる自分、聞かれる自分をしか「自分」と感じられないということ、そしてその分裂が、彼の「神聖な砦」＝「生命の核」を脅かしていると感じていることである。

しかしロレンスの自己解剖のメスは、ここで止まらず、さらに彼の「聞」の奥深くを切り裂いていく。

私は低級な創造物を敬遠した。真の知性を獲得するのに失敗した姿をそれに重ね合わせてしまうからだ。そうしたものがいやおうなく目の前に現れると憎悪した。生き物に手を触れるのは汚らしいことで、向こうが私に触れてきたり、性急に私に関心を示したりすると、ぞっとした。こうした反応は、雪片がその本来のコースを落ちるように、私の中の原子を感じる嫌悪であった。もし私の頭が独裁者でなかったなら、今の私のような人間と正反対になることを選んだであろう。私は女性や動物が私に及ぼす絶対専制を乞い求めた。私が一番情けない気持ちになるのは、兵士が女を連れて歩いていたり、男が犬を撫でているのを見たりするときだった。彼らのように、浅薄で、そして完成されたものでありたいと願っていたからだ。しかし私の牢獄の番人は決して私にそれを許さなかったのだ。

私の中では、感情と幻想とがたえず争っていた。理性には相手を打ち負かすだけの力はあったが、その負かした相手を無にしてしまったり、あるいは逆にそれを好きになるのを押しとどめるほどには強くなかった。愛を本当に知っているということは、おそらくは自己が軽蔑するものを愛することであった。しかし私にはそれを望むことしかできなかった。物質の優越性の中に幸福を見ることはできたが、それに身を捧げることはできなかった。なにげなく言われることが私の中を簡単に通り抜けてしまうくらいに精神を眠らせようと努力することはできた。

しかしそれは、苦々しくも、目覚めたままだった。

私は自分の下にあるものが好きだった。だから喜びや冒険を下方に求めた。墮落にこそ確実性が、最終的な安全があるように思われた。人間はどんな高さにも登ることができる。しかし同時に、動物のレベルもあって、そこから下には落ちることはない。そこそが、休息し、満足を感じる場所であった。……⁴²⁾

「ヴィジョンの力」は弱かったかもしれないが、自己を分析する理知の眼はおそろしく鋭い。自意識の「病」、すなわち見られる自分と見る自分との分裂にさいなまれるあまり、その分裂に悩まされていない、あるいは彼の目にそう映る「浅薄な」存在、すなわち女性や犬に大きな満足を見出し、それらの「絶対専制」に身を委ねて自らの「頭」をまったく働かせる必要のない存在に羨望の念を抱くロレンス。そうした人間は、彼が理想とする「脳を眠らせ」⁴³⁾ た人間に思えたのである。「頭」、「精神」、「理性」、「知性」、「頭脳」といった語の頻用、そしてそれらの象徴としての「牢獄の番人」——こうしたものの「絶対専制」から逃れようと、彼は「動物のレベル」への「墮落」に自己の存在を支えてくれる「確実性」を、「最終的な安全」を見ようとする。

こうした分裂を彼は別の言葉でも表現している。「きみの精神は何階建てかのビルのようなものだ。そこに入居しているのはきみだけで、そのときどきの気分次第で、ある階から別の階へ、部屋から部屋へと動き回っているんだ。」⁴⁴⁾ このような人間の精神あるいは意識の見方は、G・I・グルジェフのそれと酷似している。

人間が常にまったく同じであると考えるのは、最大のまちがいだ。人間は、長い間同一であることは決してない。ある人がイワンと呼ばれていれば、われわれは彼を常にイワンだと考える。実は決してそうではないのだ。今イワンなら、次の瞬間にはピョートルになり、1分後にはニコライに、セルゲイに、マシューに、サイモンになる。……彼らはみな自分を<私>と呼ぶ。すなわち、彼らは自分自身を支配者と考え、他を認めたがらない。彼らひとりひとりが1時間ほど国王になり、何も考慮せずにやりたいことをやり、後で他の者がそのしりぬぐいをしなければならぬというわけだ。……それがわれわれの生なのだ。⁴⁵⁾

ここで述べられている人間の内的統一の欠如は、ロレンスの確信でもあった。「……人間というものには内乱状態にあり、そのため、調和させたり、論理的に整合性のある統一体にすることは不可能だろう。……要するに、人間は、あるいは人類は、有機体であり、自然の産物である以上、教育によって変えることなどできないのだ。もって生まれた性質も皮膚の色も変えることはできず、肉体を超越したり、死と肉体性をもたないものを生み出すこともできないのだ。」⁴⁶⁾ 人間の変化の可能性に対するこの完全なベシミズムに注目されたい。グルジェフも同じく人間を「内乱状態」にあると見るが、しかし彼は同時にそれを変える可能性を強調する。つまり人間が変わるための必須の自己認識としてこれを説くのである。その意味でこの二人は、同じ人間観からまったく逆のものを見ていたといえよう。

ロレンスの中に巣くうこのベシミズム、その明察さえも飲み込んでしまうベシミズムは、前稿でも論じた彼の生涯をおおう存在論的不安から生じたものであろう。彼は『叡智の七柱』の冒頭で、アラブ人と自分を、そして西洋人一般を比較している。彼の見るアラブは、「われら現代人の茨の冠である疑うこと」を軽蔑し、「内省的に考察する」⁴⁷⁾ という行為を理解しない。「思考にとりつかれた性質」⁴⁸⁾こそ自分の本質だと自覚する彼は、「自己を問いつめること」から離れることができない自分に比べると、「彼らは何が真実で何がそうでないかを、何を信じ、また何を信じないかを知っているだけで、われわれにたえずつきまとう、きらびやかな服を着たあのおずおずとした随行員にはまったくわずらわされないのだ。」⁴⁹⁾「おずおずした随行員」とは自己を常に対象化して眺め、いかなるものにも合体・没入することをさまたげ、それゆえ真に生きているという感覚を奪い去ってしまうあの自意識、彼自身みじくも「牢獄の番人」と呼んだものにほかならない。そしてこの自意識の、「つねに自己を問いただす」意識の支配を、自分、西洋人、いや現代に生きる多くの人間にとりついた「精神の病」⁵⁰⁾と呼ぶのである。

こうした「精神」=自意識の「病」とはいかなるものであるのか。D・H・ロレンスを論じる寺田建比古は、この「病」の根底に、近代人の「自己独立化」を見る。すなわち、「本来自己がその一部である自然と歴史から自らを切断して自由となった自己肯定的な、かつ自己自身へと制約された意識」⁵¹⁾がもたらすものであり、そしてこの「自己独立化」とは、人間の「意識の眼」の独立の謂いであると言う。

「畏」とは、他ならぬ、「見張りしつつ」、生けるものの首を絞め殺す装置に他ならない。人間の意識の眼の畏に補足されるところ、あらゆるものは死の残骸となる。殺戮の手段は、も早自明的に「対象化」である。対象化は、開かれし世界への出口を切断する。⁵²⁾

「牢獄の番人」が常に彼を見張っていて、何をしても口を出し、干渉する。「思考にとりつかれた」ロレンスの眼は独立し、見る主体と見られる客体をくっきりと分けてすべてを対象化する。その結果、彼は本来自分が属していたはずの大いなるものに対する帰属意識を完全に失い、それを奪回せんと、そして「開かれし世界への出口」を見つけようと、上に見たような単純な人間、単純なレベルの「合体融合」に、そして動物レベルへの「墮落」に救いを求めるのだ。

彼の友人のエリック・ケニントンが、師と仰ぐ人物に『叡智の七柱』のある章を読ませて感想を聞いたが、それはここでの考察と驚くほどの一致を見せている。

「この本を読んで胸が痛んだ。著者は、私の知るかぎりでは誰も比較できないほど傑出した人物だが、しかし彼はおそろしくまちがっている。自分自身ではないのだ。自分の『私』を見つけはしたが、しかしそれは彼の真の『私』ではない。この先彼がどうなるかと思うと身震いする。彼は何をやってもその中で生きていないのだ。交感というものがあったくない。生命が流れ通る管にすぎないのだ。非常にすばらしい管ではあったらしいが、真に生きるには管以上のものにならねばならない。」⁵³⁾

こうした人間、つまり自己をとりまく運命、とりわけ歴史的運命と必死に闘争するが、いかなる行動も自意識の妨害ゆえに真の行動とはならず、そこが生命を感じる場ともならず、「牢獄の番人」の見張りゆえにアラブ反乱という歴史とも合体することのできなかった人間が、死に最後の救いを見たとしてもなんの不思議もない。

しかし、こうした形での自意識からの解放が真の自由をもたらさないことは明白であろう。真の自由とは、自意識が自己の中に引き起こす葛藤と分裂を運命として受けとめ、その困難にあえて立ち向かう結果得られるものである。ロレンスが選んだのは、その超人的な努力の後であるとはいえ、これを回避する道であった。いや、もしかすると、アラブ反乱という死と隣り合わせの状態に身を置いた最大の理由も、彼の内に潜むこの欲求だったのかもしれない。後年彼が、すべての名誉と栄達の可能性を捨て、偽名を使って一兵卒として軍隊に潜り込んだことは、多くの人を驚かせ、また不思議がらせたが、その最大の誘因は、戦争という、これを回避する最良の場が閉ざされ、バリ講話会議での幻滅で良心の呵責をいやがうえにも強く感じるようになった彼が、絶え間なく機能して彼を批判しつづける自意識、彼が女性や犬と、いやおそらくはもっと巨大なもの「一体化」するのをさまたげる自意識から逃れようとする欲求であっただろう。そうした自分の行動を、彼は自ら「精神の自殺」⁵⁴⁾と呼んでいる。

後に彼は軍隊になじみ、除隊したときには寂しささえ感じているが、入隊の当初はその野卑さにへきえきた。ライオネル・カーティスにはこう書き送っている。

ここの生活はひどいが、みんなは順応している。あるとき私が誰かに、「あいつらは猫を見ると本能的に石を投げるようなやつらだ」……と言うと、「じゃあお前さんは何を投げるんだい」と聞き返してきた。私がここの図柄にぴったりはまっていないことはわかってもらえると思うが、でもそのうちきつとはまるようになるよ。……自分を墮落させるのがぼくの目的なんだ。……もしかしたら解決は多重人格にあるのかもしれない。自分の本やアラブ反乱を、そして新しくできた国々をこきおろすのはぼくの理性なんだ。なぜとって、人間が引き起こすごたごたが帰着する唯一の理性的な結論は、ハーデイが言うようなベシミズム、冬の荒野にそっくりのベシミズムなんだから。……⁵⁵⁾

規則と義務と肉体の酷使、そして繊細さをいっさい拒否する空気が支配する軍隊、ここにいれば、自意識は完全に停止させておくことができる。かつての師であるホガースは、これを「自分に南京錠をかけるために入隊した」⁵⁶⁾と評したが、鋭い眼力というべきだろう。

ロレンスの言う「理性」や「知性」、「精神」などが、フロイトの「超自我」に近いことは明らかだと思われるが、さらにブレイクの創作になる理性の権化「ユリゼン」(="your reason")との親近性も感じられる。上に引いたカーティスへの手紙にはこうある。「そのうち私も……『存在するもの、すべて聖なり!』というブレイクの驚くべき言葉に共感できるようになるつもりだ。これはぼくにはこれまでに表現された最良の言葉のように思われる。」⁵⁷⁾しかし彼は、決してこの言葉を、そしてそれを生み出した精神をブレイクと共有することはなかった。存在するものをすべて聖なるものと

見るには、彼はあまりに自意識に、「眼の罨」にとらわれすぎていた。別のカーティスへの手紙に、彼はウェルズの町の堀で見た魚のことを書いている。「……魚の生活がいかにすばらしいものであるかという思いが私を打った。魚は人類から自由であり、彼らを守ってくれる水の中で、痛みも感じず、神経を働かせることもなく、いつも完璧に浮かんでいるのだ。……ぼくは魚か……小鳥になりたい。」⁵⁸⁾

この深いニヒリズムは、一方で無私の態度を生み出す。彼の死後カーティスはこう書いている。「ロレンスはいつも人に、自分自身を、友愛を、時間を、頭脳を、所有物を、そして（もっているときには）とりわけ金を、惜しみなく与えたが、他人から何かしてもらったり物を受け取ったりするのは嫌がった。」⁵⁹⁾ 植民地省でのロレンスの上司であり、終生彼に対する深い敬意を失わなかったウィンストン・チャーチルも同様の観察をしている。

現代世界における想像力を彼が見事に理解していたのは、自然が産み出した無数の子供たちに与えてくれる恩恵に彼が無関心だったからである。自然が与える心の痛みは十分に感じる事ができたが、その恵みには心を動かされなかった。家庭、金、快適さ、名声、権力——こうしたものは、彼にはほとんど、あるいはまったく意味がなかった。……孤独で厳格、確固不動の彼は、われら凡人の運命をはるかに超えたところで生きたのだ。彼にとって生存はひとつの義務にすぎなかったが、その義務は実に忠実に果たされたのである。⁶⁰⁾

しかし、当然のことながら、そのような「義務」としての生を自意識にさいなまれながら送る努力にはいつかは限界がくる。除隊から突然の死が訪れるまでの数カ月間に書かれた手紙は、そうした努力が突如として取り除かれたときの不安と空虚感をあますところなく語っている。

空軍を失ったことで、私は麻痺しています。……実際、いつもカーテンが降りることを願っている自分に気づくのです。まるで自分の人生が終わってしまったような感じです。⁶¹⁾

……今の私の「失われた」ような感覚……⁶²⁾

今は空っぽのような生活を送っています。⁶³⁾

毎日、日が上り、輝き、夕方がやってきて、眠る、その繰り返した。何をやったのか、何をやっているのか、何をやるつもりなのか、ぼくにも見当がつかない。きみはこれまで、自分が一枚の葉で、秋になって木から落ち、どうしていいかわからない、といった気持ちになったことがあるかい。今の気持ちはまさにそれだ。⁶⁴⁾

かつて彼は、入隊当初の緊張の中で、こう手紙に書いた。「気分が熱してきてコントロールがきかなくなると、ぼくはバイクを引っぱり出して、全速力で何時間も悪路をぶっとばすんだ。神経は疲

れきってほとんど死んだようになってるので、なにか生死を賭けるような危険を冒さなければ、生きていくという感じを呼び覚ますことができないんだ。でもそうして得た『生』も、一日のほんの9分の2を賭ける価値しかない憂鬱な喜びにすぎない。」⁶⁵⁾そして今、ニヒリズムの極限にまで近づいたロレンスの中で、死の欲求はいやがうえにも高まる。「ああ神よ、私の魂は疲れています。私はただ横になって、眠って、そしてそのまま死にたいのです。死はもっとも望むところです。覚めることがないのですからね。私は、私の罪業、そしてこの世界の倦怠を忘れたいのです。」⁶⁶⁾

4. 「ぼくは無だ。」

『叡智の七柱』の巻頭の詩はこう始まる。

私はお前を愛していた、それゆえ私はこれら群れなす人々をこの手に統べ、
私の意志を空いばいに書きつけたのだ。
それもすべてはお前に、自由を、七つの柱をもつ高貴なる家を与えんがためであり、
われわれが再会するとき、お前の眼が私にほほえむのを
見たいがためであった。

「叡智の七柱」とは自由の象徴であり、それを彼は「S. A.」なる人物に捧げている。この人物を詮索する議論は今もあるが、それほど重要であるとは思われない。ロレンスがこの詩を自著の巻頭に置いたのは、むしろ、その人物に仮託して、ロレンスが自らの自由を獲得しようとする意志を表明するためであっただろう。

しかし、第2スタンザになると急にトーンが変わる。

死はこの道を行く私の従者のようであった。やがてわれわれは近づき、
お前が待っているのが見えた。
お前がほほえんだとき、悲しみにとらわれた死はわれわれを羨み、
私を出し抜いてお前を奪い去った
死の静けさの中へと。

そしてこの詩の最後のスタンザを、彼はこう不気味に締めくくる。

人々は私に、お前の思い出のためにわれらの仕事をやりとげ、あの神聖な家を
建てるよう懇願した。

しかし私は折りを見計らってこれを未完成のまま打ち壊した。そして今では、
小さなうじ虫がはいだしてきてあばら屋を建てている

お前が残してくれた贈り物の
傷つけられた影の中に。

彼は、あれほど求めた自由の象徴である「神聖な家」を「未完成のまま」自らの手で打ち壊し、虚無感から逃げようと軍隊に身を投じ、バイクのスピードに命を賭け、そして死んだ。それ以前に死んだとされる「お前」も、今やうじ虫のえさ、すなわちニヒリズムの餌食となりはてている。そのうじ虫が建てる「あばら屋」は、ロレンスが打ち立てようとした輝かしい「七つの柱をもつ高貴なる家」のあまりに無惨な陰画である。彼は、自由を、自意識からの自由を獲得し、「お前」すなわち大いなる全体との合体融合を果たそうとする試みを放棄した。歴史の運命に従うという「義務」を忠実に果たしたロレンスは、しかし「生」が促す運命に従う義務は拒否したかのである。前稿の結論で私は「生が彼に課した運命をすべて引き受けた」と書いた。出自の複雑さ、母からの清教徒的な愛の強制と強要、病理学的な性意識、こうした個人的運命を彼は強い意志で引き受け、さらには歴史が課した「帝国」と「ニヒリズム」という運命にも常人を超えた知力と体力をもって耐えた。すでに見たように、ロレンスは『叡智の七柱』という一大著作に、『ツァラトゥーストラ』がニーチェにとってもっていたような意味」を付与し、これによって自己の内部に巣くうニヒリズムを超克せんとした。しかし晩年の彼の内部でニヒリズムがさらに深化するのを見るとき、彼がこれをニーチェ的な能動的ニヒリズムに転化したとは考えにくい。巨大な母なる自然の一部からの「独立」、それに必然的に伴う主客の分離、自己を「見る者」としかとらえられない近代人の孤立、そしてその必然的帰結たる「神の死」、すなわち絶対的価値と基準の消滅——こうした近代人を呪縛する運命に、ロレンスはもっとも深くとらえられ、そしておそれるべき努力でこれに立ち向かった。しかしその運命はあまりに重く、ついには彼を押しつぶしてしまう。彼がケニントンにつぶやく言葉、“I am nothing”⁶⁷⁾ は、自画像というにはあまりに無惨ではないか。

彼の死の10年あまり前、アングロ・サクソンが産んだもうひとりの激烈なるニヒリズムとの闘士、D・H・ロレンスは、近代人をとらえて離さぬ自意識の「病」をこう喝破していた——「罪とは自己を見ること、すなわち自意識である。……われわれは二元的な存在だ。十字架だ。……われわれは自分自身に対して引き裂かれているのだ。」⁶⁸⁾ そして彼自身の死の直前にはついにこう断言する——「個人は愛することはできない。……そして近代人は男も女も自分を個人としてしか認識できないのだ。」⁶⁹⁾ 自己の中の分裂を明瞭に自覚すること、そしてそれが生み出す苦悩の深さという点で、T・E・はD・H・の認識をその存在で表現したと言っている。しかも彼には、D・H・がかりうじて最後に見出した救い、すなわち「聖霊」による二元性の克服＝大いなる全体との融合への望みさえも完全に拒まれたのである。彼の残された道は死以外になかった、と言うべきであろうか。

しかし実は、ほかならぬ彼自身が、ネガティブなものを見抜く不気味なまでの洞察力でこの結末を予見していたではないか——「失敗こそが人間の特権であり、「確実な失敗からは得るものは多い」と。「自らの運命を完遂したロレンス」という前稿の結論は、かくして以下のように言い直さねばなるまい。自意識＝「眼」の罫との闘いに彼は破れた。しかしそれは、ニーチェが、あるいはD・H・ロレンスが破れたというのとまったく同じ意味で破れたのであり、その「敗北」、すなわち「確実」で崇高でさえある「失敗」においてこそ「自己の運命を完遂した」のである。ニヒリズムが微妙に姿を変えながらも、いよいよその様相を濃くしている現代に生きるわれわれにとって、彼の「失敗」の意味はあまりに大きく、また重い。その意味を鋭く見抜き、その重さをもっとも真摯に受

けとめたのは、もうひとりの「眼」の人、オルダス・ハクスリーであった。

……彼は人間が個人としてもてるものはすべてもっていた——才能、勇気、不屈の意志、知性、すべてだ。こうした贈り物は、彼が驚くべきこと、ほとんど信じられないようなことをすることを可能にしはしたが、「光明」や「救済」、「解放」をもたらすという意味ではほとんどなんの役にも立たなかったのだ。……ロレンスは英雄のみがもちうる自己意志をもっていた。それは実際巨人的であつた。しかし今つくづく感じられるのは、彼がその人生の大半を、地獄の業火が燃え盛る場所で過ごしたということだ。⁷⁰⁾

注

- 1) E・バウムガルテン、『マックス・ヴェーバー 人と業績』、生松敬三訳（福村出版、1971年）、165-66頁。
- 2) エドワード・W・サイド、『オリエンタリズム』、板垣雄三、杉田英明監修、今沢紀子訳（平凡社、1986年）、202頁。
- 3) スレイマン・ムーサ、『アラブが見たアラビアのロレンス』、(リプロポート、1988年)、iv頁。
- 4) 前掲書、iii頁。
- 5) 前掲書、4頁。
- 6) 前掲書、iii頁。
- 7) 前掲書、5頁。
- 8) 前掲書、537頁。
- 9) T.E.Lawrence, *Seven Pillars of Wisdom* (Harmondsworth: Penguin Books, 1962), p. 21.
- 10) *Ibid.*, p. 22. 傍点引用者。
- 11) Jeffrey Meyers, *The Wounded Spirit: A Study of "Seven Pillars of Wisdom"* (London: Martin Brian & O'Keeffe, 1973), p. 131.
- 12) この問題は、そもそも歴史記述とは、いや、歴史とは何かという大問題に密接に関係しているが、紙幅の都合でここでは論じない。拙論「『倫理』の両刃——「オリエンタリズム的パラダイム」の光と影」(『京都橘女子大学研究紀要第24号』[1997年])、27-31頁参照。
- 13) Myers, p. 25.
- 14) *Ibid.*, p. 50.
- 15) *Seven Pillars of Wisdom*, p. 23.
- 16) *T. E. Lawrence: The Selected Letters*, (ed.) Malcolm Brown (New York: W.W.Norton, 1989), pp. 234-35. 傍点引用者。
- 17) *Ibid.*, pp. 224-25. 傍点引用者。
- 18) *Ibid.*, pp. 225-26.
- 19) *T.E.Lawrence By His Friends*, (ed.) A.W.Lawrence (London: Jonathan Cape, 1937), p. 199.

- 20) Myers, pp. 73-74.
- 21) *Seven Pillars of Wisdom*, p. 565. 「非技術的な芸術」と訳したのは"the technique-less art"であるが、なぜロレンスはこれを「文学」と同格の言葉として使用したのだろうか。ちなみに中野好夫はこれを「技術を超えた芸術」と訳している（『アラビアのロレンス』[岩波新書、1989年]、202頁）が、ロレンス自身、リチャーズやフォースターと、たとえば形容詞の使用についてなどの「技術的な」問題を論じており、文学が「技術を超えた芸術」だと考えていた形跡はない。
- 22) ムーサ、504-5頁。
- 23) 前掲書、514頁。
- 24) 前掲書、iv頁。
- 25) 前掲書、538頁。
- 26) P・ナイトリイ、C・シンプスン、『アラビアのロレンスの秘密』、村松仙太郎訳（早川書房、1991年）、77頁。
- 27) *Seven Pillars of Wisdom*, p. 63.
- 28) ナイトリイ、シンプスン、107頁。
- 29) *Seven Pillars of Wisdom*, p. 64.
- 30) *Selected Letters*, p. 169.
- 31) *Ibid.*, p. 170.
- 32) ペンギン版の背表紙より引用。
- 33) この点は拙論、「[倫理]の両刃——「オリエンタリズム的パラダイム」の光と影」で詳しく論じた。
- 34) バウムガルテン、165頁。
- 35) たとえばサイドは自分のことをこう語っている——「複数の文化の狭間にいる感覚が私にはきわめて強くなってきている。この感覚は自分の生涯を貫いている唯一の、またもっとも強烈な流れであると言ってよかろう。つまり、私はつねに事物の中に入りたり出たりして特定の一つのものに長く帰属することが現実にはけっしてできない人間なのである。」（エドワード・W・サイド、『世界・テキスト・批評家』、山形和美訳 [法政大学出版局、1995年]、515頁、「訳者あとがき」に引用されている。）
- 36) バウムガルテン、177-78頁。
- 37) マックス・ヴェーバー、「宗教的現世拒否の段階と方向の理論」、中村貞二訳、『世界の大思想』II-7（河出書房、1972年）、169頁。バウムガルテンに引用されている訳を参考にして、文章を多少改変した。
- 38) *Seven Pillars of Wisdom*, pp. 421-22.
- 39) F・ニーチェ、『ツァラトゥストラ』、手塚富雄訳、(中公文庫、1973年)、516頁。
- 40) *Seven Pillars of Wisdom*, p. 580. 傍点引用者。
- 41) *Ibid.*, p. 456.
- 42) *Ibid.*, pp. 580-81.

- 43) ナイトリイ、シンプスン、281頁。
- 44) *Selected Letters*, p. 233.
- 45) P・D・ウスペンスキー、『奇蹟を求めて』、拙訳（平河出版社、1981年）、93-4頁。
- 46) *Selected Letters*, p. 234.
- 47) *Seven Pillars of Wisdom*, p. 36.
- 48) *Ibid.*, p. 284.
- 49) *Ibid.*, p. 36.
- 50) *Ibid.*, p. 387.
- 51) 寺田建比古、『「生けるコスモス」とヨーロッパ文明——D・H・ロレンスの本質と作品』、（沖積舎、1997年）、66頁。
- 52) 前掲書、71頁。
- 53) *T.E.Lawrence By His Friends*, p. 272.
- 54) *Selected Letters*, p. 227.
- 55) *Ibid.*, pp. 227-28.
- 56) ナイトリイ、シンプスン、335頁。
- 57) *Selected Letters*, p. 228.
- 58) *Ibid.*, p. 242.
- 59) *T.E.Lawrence By His Friends*, p. 261.
- 60) *Ibid.*, p. 201.
- 61) *Selected Letters*, p. 526.
- 62) *Ibid.*
- 63) *Ibid.*, p. 531.
- 64) *Ibid.*, p. 537.
- 65) *Ibid.*, p. 237.
- 66) 中野好夫、『アラビアのロレンス』、（岩波新書、1989年）、241-42頁。
- 67) *T.E.Lawrence By His Friends*, p. 271.
- 68) D.H.Lawrence, *Studies in Classic American Literature* (Harmondsworth: Pnguin Books, 1971), p. 91.
- 69) D.H.Lawrence, *Apocalypse* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1980), p. 147.
- 70) Sybille Bedford, *Aldous Huxley: A Biography* (New York: Carroll & Graf Publishers, 1974), pp. 455-56.